

琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見

——『北上雜記』・『北京話』を中心に——

紺野達也

一 はじめに

琉球王國最末期の蔡大鼎（道光三年（一八一三）生—光緒十一年（一八八五）以降没か）は現存する作品数が琉球史上、最多の漢文學者である。それにもかかわらず、彼の著作や漢詩文について、第二次世界大戰以前は琉球漢文學という研究分野が未成熟であったため、歴史學者によって僅かに言及されるのみであった。さらに沖繩縣内にあった彼の著作は沖繩戰の戦火に遭い、全て焼失したと考えられている¹⁾。戦後、東恩納寛惇舊藏の『閩山游草』（附『續閩山游草』）・『北燕游草』・『北上雜記』（殘卷）が沖繩縣立圖書館東恩納寛惇文庫に所藏され、これら²⁾の著作およびそこに収録された作品が琉球漢文學および琉球史等における研究對象となっていた。

しかし、二〇一二年に筆者によって蔡大鼎の『漏刻樓集』

（附『伊計村遊草』）、『欽思堂詩文集』三卷、『續欽思堂集』（附『聖覽詩文稿』）が東京と大阪から發見された³⁾。その後、舊米澤藩主で第二代沖繩縣令を務めた上杉茂憲の事蹟を調査するために沖繩を訪れた伊佐早謙が持ち歸った琉球關連資料が山形縣内で見つかり、そのなかには『北燕游草』の他、蔡大鼎輯「呈文集」や彼が所藏していた漢籍が含まれていた⁴⁾。これらの資料の發見などによって、蔡大鼎、そして琉球漢文學全般に對する研究は大いに進み、また今後さらに發展する可能性を有している⁵⁾。

蔡大鼎に關する諸問題のなかで、重要な課題の一つが晩年の動向であろう。蔡大鼎は最晩年、琉球の向徳宏（幸地朝常）・林世功等とともに最後の琉球國王である尚泰の密書を攜えて清に密出國し、琉球救國（復國）のための請願を行った。その請願活動の過程で蔡大鼎は北京に滞在している。『北上雜記』は

彼がその時期に著した『雑記』をまとめたもので、赤嶺守・西里喜行・後田多敦等による琉球救國運動の研究にしばしば引用されている。⁽⁵⁾その他、崎原麗華氏は『北上雜記』に見える儒教思想について、また王振忠氏は「燕行文獻」すなわち冊封體制における朝貢使節の記録としての『北上雜記』について論じている。⁽⁷⁾筆者も蔡大鼎の生涯を論じるにあたって『北上雜記』を参照する。⁽⁸⁾

しかし、これらの第二次世界大戦後の先行研究で引用される『北上雜記』は全て前述の東恩納寛惇舊藏の殘卷『北上雜記』もしくはその影印本である。この殘卷本（以下、沖圖本と稱する）は一冊で、卷二までしか収められていない。このため、先行研究において卷三以降の内容に具體的に言及したものは管見の限り、確認できない。

本稿は、この『北上雜記』にもう一つの殘卷本が存在することを報告するとともに、その調査で明らかになった新知見を述べるものである。そして、これによって今後の蔡大鼎研究ならびに琉球學、東アジア漢文學の研究にいささかでも寄與できるのではないかと考えている。

二 福建省圖書館藏『北上雜記』

筆者は二〇一五年一二月に福建省圖書館（福州市）で『北上雜記』三冊（以下、福圖本。以下、卷數のみ示す場合は全て福圖

琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見（紺野）

本『北上雜記』の卷數を指す）を實際に目撃、調査することができた。⁽¹⁰⁾福建省圖書館所藏の古籍についてはなお目録等が出版されておらず、同書は同圖書館のカード目録で探し出した。ただし、調査日數は二日間のみで、かつ一部分の寫眞撮影しか許可されず、全ての部分を抄録する時間的餘裕もなかったため、今、その全ての内容を報告できないことは憾みとする所である。また、調査・筆寫に当たっては注意を拂ったが、適切な記事を見落したり、誤寫があった場合は、全て筆者の責に歸す。

福圖本は上述したように三冊で、表紙には黒墨書で書名・冊數が記されている。藏書印や書き入れはない。版式等は沖圖本と同一であり、両者が同時に刊刻されたことは明白である。福圖本の第一冊には序や目録等を除いて卷一・卷二が、第二冊に卷四が、第三冊に卷五と『北京話』等が収められている。

注（一）で示したように、戦前の沖繩縣立沖繩圖書館にあった『北上雜記』は四冊本である。したがって、今回発見された福圖本も完本ではなく、しかも、表紙の墨書的情況からかなり早い時点で卷三を収めた部分は失われたと判断される。また福圖本第一冊に限定すれば、末尾は沖圖本・福圖本ともに同記事で終わっていることから、封面から残っている沖圖本のほうが勝れている。しかし、これまで全く知られていなかった卷四以降が蟲害を除いてほぼ完全に残っており、総合的にみて福圖本の資料的價値は極めて高い。

三 『北上雜記』の構成と編纂過程

今回の福圖本の発見の第一の意義は、『北上雜記』の實際の構成がほぼ明らかになったことにある。沖圖本にも見える目録には、「北上雜記序三道」「贈詩六首」「祝壽一首」「祝壽長聯」「由閩北上實錄」「自序」「卷一 元旦吉記……（以下略）」「卷二 庚辰記事凡七十一通」「卷三 辛巳記事凡二百三十八通」「卷四 壬午記事凡二百零四通」「卷五 癸未記事凡一百四十九通 附紀共六十通」「北京話 北京話自序 北京話」とある。

しかし、實際には卷二は「庚辰紀事」「辛子正月中記」「辛二月中記」からなり、光緒六年（一八八〇）から翌七年二月までの記事を書いてある。そして、福圖本によって現存することが判明した卷四は「壬午三月中記」から月ごとに「癸十月中記」までを収め、光緒八年三月から翌年十月までの記事を書ける。同じく卷五には「癸未十一月・二月中記」と甲申元日の記事から始まる「附紀」があり、光緒九年十一月から翌年の記事を書ける。その後「附北京話敘」「北京話」「百家姓」「百家姓同音」「千字文」「千字文同音」「三字經」「五言古詩」「跋」（寫眞一・二）が附載され、目録と實際の構成は異なっていることが改めて確認される。

蔡大鼎が光緒六年十二月に記した「自序」に「予在京師日久、不可空過日子。由是一切之事物、或記所見、或述所聞、聊爲一

集、因名曰北上雜記、附北京話。唯所希冀者、猶爲觀者之一助云爾⁽¹²⁾（予の京師に在るの日久し、空しく日子を過ぐべからず。是れより一切の事物、或いは見る所を記し、或いは聞く所を述べ、聊か一集を爲し、因りて『北上雜記』と名づけ、『北京話』を附す。唯だ希冀する所は、猶お觀る者の一助と爲らんと云うのみ）とあり、蔡大鼎は早い時期から全體的な構成を構想していたことが窺える。ただし、卷五の「癸未十一月・二月中記」、すなわち光緒九年十一月・十二月の記事に次のような記述がある。

光緒甲申十年、正月以下、所有事宜、不論巨纖、均是畧而不紀。⁽¹³⁾前已集記者、凡七百二十九頁、⁽¹⁴⁾訂成四冊。是自庚辰孟春、以逮癸未臘月共成四年分也。適有客見之曰、是集也、記得安穩、宜早付之于梓人、以行世上。予曰、均已就正、聊無粗齒之弊。然於貴國人、不足有益。而于我鄉之子弟、聊有可觀。擬在福州、鐫之帶回矣。

（光緒甲申十年、正月以下、有る所の事宜、巨纖を論せず、均しく是れ畧して紀さず。前に已に記を集むる者、凡そ七百二十九頁、訂して四冊と成さん。是れ庚辰孟春より、以て癸未臘月に逮び共に四年の分を成すなり。適たま客有り之を見て曰く、「是の集や、記して安穩を得たり、宜しく早に之を梓人に付し、以て世上に行うべし」と。予曰く、「均しく已に就正せられ、聊かも粗齒の弊無し。然れども貴國の人に于いてや、益有るに足

らず。而れども我郷の子弟に于いてや、聊か觀るべき有り。福州に在りて、之を鐫り帶回せんと擬す」と。

要點をまとめると、①蔡大鼎は『北上雜記』に光緒六年から光緒九年までの四年分の「雜記」を収録することを考えており、光緒十年の記事を載せる意圖は本來なかつた、②『北上雜記』には修正、文飾が施されており、蔡大鼎自身は粗雑な部分はないと考えていた、③『北上雜記』を四冊本として福州で刊行する予定であつた、④おそらくは中國人から『北上雜記』の刊刻を勧められていた、⑤『北上雜記』の内容が琉球の子弟の參考に供するものであると考えていたということが言えるだろう。これらについては、福圖本の他の箇所にも認めることができる。

②について、たとえば卷四の光緒八年四月の記事に「客冬今春、先後寄請謝家、就正雜記、諄應潤色已成、俟吾反自薊門、即有交付」(客冬今春、先後して謝家に、雜記を就正するを寄請するに、諄ろに潤色已に成り、吾の薊門より反るを俟ちて、即ち交付する有りと應う)、「茲希冀者、謝家潤色早成、寄送薊門、庶乎近焉」(茲に希冀する者、謝家の潤色早に成り、薊門に寄送せんことなり、庶わくは近からん)とある。同じく八月の記事に「吾於中秋後一日、將雜記未更手者、乃託陳少軒旋南、而質于幼臣先生。諒重陽前後、謝爺晉京、所有雜記、託其令弟更止、

琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見(紺野)

定必帶來、交予收焉、不勝懸望之至」(吾中秋後一日に於いて、雜記の未だ手を更ざる者を將て、乃ち陳少軒の南に旋るに託し、而して幼臣先生に質さしむ。諒に重陽前後、謝爺京に晉るに、有る所の雜記の、其の令弟に託して更正せしむるは、定めて必ず帶來し、予に交して收めしめん、懸望の至りに勝えず)、十月の記事に「本月望日、翼臣先生到京。同寅懸望、於是已解、均有喜氣。矧予又接閱就正雜記、殊覺勝於手植花木也」(本月望日、翼臣先生京に到る。同寅懸望すれども、是に於いて已に解き、均しく喜氣有り。矧んや予又た就正せらるる雜記を接閱す、殊に手づから花木を植うるに勝るを覺ゆるなり)、翌年四月の記事にも「此日將數首草稿面託謝爺、使其函謝幼臣先生政之也」(此の日數首の草稿を將て謝爺に面託し、其れをして謝幼臣先生に函せしめ之を政さしむるなり)とある。これらの記述から、蔡大鼎が『北上雜記』の修正を依頼していたのが福州で歴代、土通事を務めていた謝氏、特に謝維藩(幼臣は字か)であり、それらの原稿の往來が北京福州間で複数回にわたって行われたことが確認される。

③については、卷四の光緒九年九月の記事に「再北上雜記五卷、均將成冊。諒是京回後、訂成四冊。每冊不過七八十葉」(再いで北上雜記五卷、均しく將に冊と成さんとす。諒に是れ京より回るの後、訂して四冊と成さん。冊毎に七八十葉を過ぎず)とあり、光緒九年の秋頃には『北上雜記』を各冊の分量をほぼ同

程度に調整して四冊の形式にし、福州で刊刻することが決定したのだろう。したがって、目録と實際の構成の異同はあるいはこの時に生じたのかも知れない。

以上の諸資料を整理すれば、『北上雜記』は當初からある程度の構想が用意されていたものの、最終的には光緒十年の秋冬頃まで清人の修正を受けながら原稿が増やされ、蔡大鼎自身の判断で五卷四冊の形で刊刻されたと考えられる。

四 蔡大鼎の家族について

福圖本には蔡大鼎の家族に關して多くの記事が見え、そのなかにはいくつか興味深い内容が記録されている。

まず指摘する必要があるのは、彼の家族に關して新たな情報が得られる記事が存在することだろう。卷五「附紀」の最末尾の次の記事は彼の父母や兄弟、妻などを明瞭に記述する。

我先考諱德懋、字能寬、先妣陳氏。兄弟七人、大鼎第伯氏、配楊氏。其仲氏大章、聘蔡氏、未娶早世。叔弟大業、配毛氏。先弟大觀有子、大受無子而沒。母弟大謨、配蔡氏。¹⁸⁾季弟大經、配梁氏、無嗣而卒。嗚呼、小子菲材、微府君厚澤、曷克成立、以蒙光顯。於是泣述一二耳。至先慈懿德、亦無不媿於此、可謂中興者也。特誌。

(我が先考德懋を諱とし、能寬を字とし、先妣は陳氏たり。兄

第七人、大鼎第だ伯氏、楊氏を配す。其の仲氏大章、蔡氏を聘せんとするも、未だ娶らずして早世す。叔弟大業、毛氏を配す。先弟大觀子有り、大受子無くして沒す。母弟大謨、蔡氏を配す。季弟大經、梁氏を配すも、嗣無くして卒す。嗚呼、小子菲材、府君の厚澤微かりせば、曷ぞ克く成立し、以て光顯を蒙らんや。是に於いて泣述すること一二のみ。先慈の懿德に至りては、亦た此に媿せざるなし、中興と謂うべき者なり。特に誌す。)

これまで蔡大鼎の兄弟の数については二説あったが、この資料により長幼順に大鼎・大章・大業(後に毛氏に養子に出る)・大觀・大受・大謨・大經(後に鄭氏に養子に出る)の七人であることが確認され、不明であった蔡大鼎の妻も楊氏であることが判明した。

ところで、蔡大鼎が中國でかくも自らの兄弟とその妻という家庭内の情況、言い換えれば身内にとつてはあまりにも常識的なことを詳しく書いた理由ははっきりとしない。²¹⁾ただ少なくとも執筆の動機の一つに亡父母への追慕があることは誤りないだろう。實際、父母の忌日には彼らを思う記事を遺している。²²⁾具體例を挙げれば、光緒九年七月には「不肖爲異客來、八易星霜、每值先嚴大人冥誕、層有公同商辦、不使請願假、徒懷風木之思耳。心實難安。本月二十九日、感泣特誌」(不肖異客と爲りて來り、八たび星霜を易え、先嚴大人の冥誕に値う毎に、層ね

て公同に商辦する有り、假を請願するに便ならず、徒らに風木の思を懐くのみ。心實に安んじ難し。本月二十九日、感泣して特に誌す（巻四）と記している。およそ一年後に附加されたと思われる自注にも「向來於先父母之忌辰、概不敢忘却。惟是甲申七月念九冥誕、實有遺失得罪、所以然者則身衰之所致乎、抑且病後之故乎、悔恨罔極、故附紀焉」（向來先父母の忌辰に於いて、概ね敢て忘却せず。惟だ是れ甲申七月念九の冥誕、實に遺失する有りて罪を得、然る所以は則ち身衰の致す所か、抑且も病後の故か、悔恨極まる罔し、故に附して紀す）とある。これらの記事は蔡大鼎の孝心を改めて示すものであろう。

蔡大鼎の筆は存命中の家族にも及ぶ。『北上雜記』には蔡大鼎と同様、清へ密出國していた長男の蔡錫書や弟の毛大業の名がしばしば見られる。また琉球に遣した孫の蔡上臺にも言及する。彼については既に卷一の「長孫上臺十三歲誕生記」「擬長孫元服記」が知られていたが、福圖本ではたとえば卷四の光緒八年五月の記事に「會閱新任撫院奏內、有接篆二字、乃擬長孫名上臺、甫之垣、別號。曾賀週歲時、渠於百玩內、先既握印、故取其嘉瑞而名焉。未知當否、他日應質於高明耳」（會たま新任の撫院の奏内を閲し、接篆の二字有り、乃ち長孫の上臺を名とし、之垣を甫とするの別號に擬す。曾て週歲を賀する時、渠百玩の内に於いて、先づ既に印を握り、故に其の嘉瑞を取りて名づく。未だ當否を知らず、他日應に高明に質すべきのみ）という。つま

琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見（紺野）

り、蔡大鼎は孫の別號として用意していた「接篆」の二字をたまたま目にし、それに觸發されてこの記事を記している。²³⁾

ここで注目したいのは、蔡大鼎はこのなかで「高明」すなわち學識の優れた人物に孫の別號の當否を尋ねたいと表明した點である。すなわち、この記事は孫の別號という家族の問題を取り上げていることになる。

家族に關わる問題について、蔡大鼎はさらに別の方法を用いて憂慮や懸念を取り拂おうとする。光緒八年六月には琉球からの「家書」を得て次のようにいう。

悉知親戚人等、公同商辦、現賣舊宅、租居表弟陳氏厦房。專出於欲解伊憂之意也。茲謂、如許行徑、是損己利人、可云善行、且有遷喬木之趣。第家資素乏、恐有不能久住。是以六月朔日、謹爲其筮。曰火遭水必受傷、茗還交濟、自不相妨。按此、可得久住之象也。稍解憂慮。特誌。

（悉く知る、親戚人等、公同に商辦し、舊宅を現賣し、租して表弟の陳氏の厦房に居るを。専ら伊憂を解かんと欲するの意に出づるなり。茲に謂えらく、許くの如き行徑、是れ己を損い人を利し、善行と云うべく、且つ喬木に遷るの趣有り。第だ家資素より乏しく、久しく住まるに能わざる有るを恐る。是を以て六月朔日、謹んで其れが爲に筮す。曰く、火水に遭えば必ず傷を受くるも、茗還た交も濟け、自ら相妨げずと。此を按ずる

に、久しく住まるの象を得るべきなり。稍憂慮を解く。特に誌す。(巻四)

この記事は在琉琉球人に對する琉球本國からの連絡を實證する資料としても貴重だが、ここでは蔡大鼎が家族の轉居について、筮竹、つまり占卜によって判斷していることに注意したい。⁽²⁴⁾蔡大鼎は久米村士族である蔡氏(伊計家)の家長ではあるものの、密命を帯びて北京に赴いており、歸國の目途の立たない彼が琉球に遺した家族の現實の問題に關わり得る部分は實際にはほとんどなかっただろう。そのような情況にあるからこそ、彼にとって占卜は問題に「關與」できる数少ない「現實的」な方法の一つであり、それゆえその好ましい結果を「特誌」すなわち特に記したと考えられる。

このように蔡大鼎は家族のことを『北上雜記』中で繰り返して述べており、その結果、彼の家族そのものについて、また家族に對する彼の思いをより詳細に知ることができるようになった。言うまでもなく、蔡大鼎が家族のことを記したのは、彼が北京滞在中にしばしば家族を追憶、懸念していたからに相違ない。もちろん、家族や親類を思う心情は特別なものではなく、まして異國の地にある時、故郷や遺した家族等(故人も含まれる)に一層思いを馳せることは奇妙ではない。ただ、蔡大鼎の記事からは、彼がそういった心情を思いに任せて書いているのでは

ないことが看取できる。むしろ、いわば身内の情況や彼らに對する思いを詳しいながらも、一方で「特誌」とあるように選擇しつつ、記述する蔡大鼎の態度も明らかにするのである。

五 晩年の蔡大鼎と詩歌との關係

冒頭に述べたように、蔡大鼎は琉球史上、最多の漢詩を遺し、おそらくその多くの詩が彼の詩文集に收録されている。それにもかかわらず、『北上雜記』には自らの詩作についてほとんど記録していない。⁽²⁵⁾それでは、彼は救國運動という政治上の課題に直面し、あるいは高齡となったこともあって、文學、特に傳統的な漢詩文に接する暇がなくなったのだろうか。さらには、そもそも漢詩文への興味を失ってしまったのだろうか。

結論から言えば、詩歌の創作こそほとんど確認できないものの、決して漢詩文に對する關心を失ったわけではないように思われる。

たとえば、卷四の光緒八年四月の記事に、

見説、詩有律與排律之別、四韻可稱律、六韻以上、皆排律也。然四韻、或有稱排律者、故書。

(見るならく、詩に律と排律との別有り、四韻は律と稱すべく、六韻以上は、皆排律なりと。然れども四韻、或いは排律を稱する者有り、故に書す。)

という。ここでは「律(詩)」と「排律」の區別について記すとともに、律詩のように四韻(八句)であっても「排律」と呼ぶものがあることを指摘する。蔡大鼎は青壯年期から律詩を多敷作っており、さらに彼の最初の漢詩文集である『漏刻樓集』所收「誕辰誌喜」において二首の律詩を自ら「排律」と呼んでいる。つまり、この記事は律詩・排律に關する何らかの説明に對して、蔡大鼎が反論したものではないだろうか。蔡大鼎の見聞した律詩・排律に關する説、そして彼の反論の據るところは未詳ながら、少なくとも彼が詩歌とくに詩作に對する興味を失っていないことを示している。

また『北上雜記』のなかには漢詩文そのものが引用されている。以下、具體例をいくつか見てみたい。卷四の光緒八年七月の記事に次のように記す。

十五日、卓午雷雨大作、少頃天晴、夜來月明、當令予有不尽吟哦也。詩有之、中庭地白樹棲鴉、冷露無聲濕桂花。今夜月明人盡望、不知秋思在誰家。又曰、牀前明月光、疑是地上霜。舉頭望明月、低頭思故鄉。

(十五日、卓午に雷雨大いに作り、少頃くして天晴れ、夜來月明らかにして、當に予をして吟哦を盡さざる有らしむるなり。詩に之有り、中庭地白く樹に鴉棲み、冷露聲無く桂花を濕す。

琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見(紺野)

今夜月明らかにして人盡く望む、知らず秋思誰が家に在るかを。又た曰く、牀前明月の光、疑うらくは是れ地上の霜かと。頭を擧げて明月を望み、頭を低れて故郷を思うと。)。

ここで引用されているのは王建「十五夜望月寄杜甫郎中」(『唐』卷三百一)と李白「靜夜思」(『唐』卷百六十五)であり、いずれも人口に膾炙する作品である。他にも光緒八年三月に自らの「科」(科擧に類する琉球の官吏登用試験)の及第を追憶し、それを記す記事(卷四)の自注に李白の「答族侄僧中孚贈玉泉仙人掌茶并序」(『唐』卷百七十八)の序を節畧し、あわせて韓愈「山石」詩(『唐』卷三百三十八)の冒頭二句を引き、「山石攀確行徑微、黃昏到寺蝙蝠飛」(山石確に攀り行徑微にして、黃昏寺に到り蝙蝠飛ぶ)という。

『北上雜記』に引用される詩はいわゆる名家の作品ばかりではない。光緒八年七月、琉球處分をめぐって琉球國內に生じた黨派に關する記事を當時の新聞『申報』で讀んだ後、蔡大鼎は次のように記す。

日昨接閱申報悉知本國因云云事、分爲白黑兩黨。乃嘆息歌曰、蒼天如圓蓋、陸地如棋局。世人黑白分、往來爭榮辱。榮者自安安、辱者定碌碌。南陽有隱居、高眠不足。(卷四)

(「日昨、『申報』を接閲し、悉く本國云々の事に因り、分れて白黒兩黨を爲すを知る。乃ち嘆息して歌いて曰く、蒼天圓蓋の如く、陸地棋局の如し。世人黑白に分かれ、往來榮辱を争う。榮うる者は自ら安妥、辱めらるる者は定めて碌碌。南陽に隱居有り、高眠して眠りて足らず。)

蔡大鼎が慨嘆して歌うのは『三國志演義』(百二十回本)第三十七回で隆中の諸葛亮を訪れる劉備が聞いた農民の歌う歌であり、蔡大鼎の自注にあるように作中では臥龍先生、諸葛亮の作となっている。琉球では官話教材として『水滸傳』や『三國志』等の「稗史小説」⁽³¹⁾を用いており、蔡大鼎自身も「讀列國三國兩志、口號絕句」(續欽思堂集)附『聖覽詩文稿』所收)詩を詠んでいる。したがって、久米村士族である蔡大鼎は『三國志演義』に親しんでおり、作中の詩を知悉していたことが窺える。

同じく卷四の光緒八年七月の記事には

當時誦讀而無厭者夥矣。就中古詩有云、國正天心順、官清民自安。妻賢夫過少、子孝父常寬。又曰、閑來無事不從容、睡覺東窓日已紅。萬物靜觀皆自得、四時佳興與人同。道通天地有形外、思入風雲變態中。富貴不淫貧賤樂、男兒到此是英雄。此誠不可厭者、所以登載。

(當時誦讀して厭くこと無き者夥し。就中く古詩に云う有り、國正しくして天心順に、官清くして民自から安んず。妻賢にして夫過ち少く、子孝にして父常に寛くす。又曰く、閑來事として從容ならざる無く、睡り覺めて東窓日已に紅なり。萬物靜觀すれば皆自得し、四時佳興人と同じからん。道は通ず天地有形の外、思いは入る風雲變態の中。富貴にして淫せず貧賤にして樂しむ、男兒此に到れば是れ英雄と。此れ誠に厭くべからざる者にして、登載する所以なり。)

とある。引用されている二首の詩のうち、第二首は北宋・程顥「秋日偶成二首」其二(『宋』卷七一五)である。⁽³²⁾一方、第一首の出典は定かではないが、幼學書の種類である『名賢集』に見える詩の一節⁽³⁴⁾であり、蔡大鼎が幼學書から引用した可能性が高い。

そして、今回の福圖本の発見で「五言古詩」三十九首が『北上雜記』に附載されていることが明らかになった。ここには絶句・律詩・古詩が含まれており、「古詩」とは古人の詩という程度の意味に過ぎない。その冒頭に、

右者、見于三字經之高頭者也。如此附之、蓋欲使童蒙、此經一併、讀取數百遍、而有以自得也。今後輩深體先儒之心、亦如斯登錄云爾。

(右は、『三字經』の高頭に見ゆる者なり。此くの如く之を附すは、蓋し童蒙をして此の經と一併し、讀取すること數百遍、而うして以て自得する有らしめんと欲すればなり。今後輩深く先儒の心を體し、亦た斯くの如く登錄すと云うのみ。)

と記してあり、彼が目睹した『三字經』の「高頭」、すなわち前面に見えた五言古詩を轉載したものと考えられる。前述したように、福圖本ではこの「五言古詩」の前に「三字經」が置かれている。その『三字經』の版本および入手の経緯は明確ではないが、同じく『北上雜記』に附載された「百姓家同音」・「千字文同音」の記述から判断すれば、おそらくこの『三字經』も同様に北京で購入したものであらう。以下、その三十九首を示しておきたい。(訓讀は省略する)

- 1 清夜吟 邵康節
月到天心處、風來水面時。一般清意味、料得少人知。
- 2 四時 陶淵明
春水滿四澤、夏雲多奇峰。秋月揚明輝、冬嶺秀孤松。
- 3 江雪 柳子厚
千山鳥飛絕、萬徑人踪滅。孤舟簑笠翁、獨釣寒江雪。
- 4 訪隱者不遇 僧無本
松下問童子、言師採藥去。只在此山中、雲深不知處。

琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見(紺野)

- 5 蠶婦 無名氏
昨日到城郭、歸來淚滿巾。偏身綺羅者、不是養蠶人。
- 6 憫農 李坤
鋤禾日當午、汗滴禾下土。誰知盤中餐、粒粒皆辛苦。
- 7 讀李斯傳 李艱
欺暗當不煞、欺明當自戮。難將一人手、掩得天下目。
- 8 王昭君 李太白
昭君拂玉鞍、上馬啼紅顏。今日漢宮人、明朝北地妾。
- 9 劍客 賈島
十年磨一劍、霜刃未曾試。今日把似君、誰有不平事。
- 10 七步吟 曹子建
煮豆燃豆箕、豆在釜中泣。本是同根生、相煎何太急。
- 11 競病韻 曹景宗
去時兒女悲、歸時笳鼓競。借問行路人、何如霍去病。
- 12 貪泉 吳隱之
古人云此水、一飲懷千金。試使夷齋飲、終當不易心。
- 13 南山有感 白居易
萬里路長在、六年今始歸。所經多舊館、大半主人非。
- 14 金谷園 無名氏
當年歌舞地、不說草離離。今日歌舞盡、滿園秋露垂。
- 15 春桂問答 王維
問春桂、桃李正芳華。年光隨處滿、何事獨無花。

16 (其二)

春桂答、春華詎能久。風霜搖落時、獨秀君知否。

17 遊子吟 孟郊

慈母手中線、遊子身上衣。臨行密密縫、意恐遲遲歸。難將

寸平心、報得三春暉。

18 子夜吳歌 李太白

長安一片月、萬戶擣衣聲。秋風吹不盡、總是玉關情。何日

平嬌虜、良人罷遠征。

19 友人會宿 李太白

滌蕩千古愁、留連百壺飲。良宵宜且談、皓月未能寢。醉來

臥空山、天地皆衾枕。

20 雪谷雜咏 朱誨菴

野人酒載來、濃談日西夕。此意良已勤、感嘆情何極。歸去

莫頻來、林深山路黑。

21 傷田家 聶夷中

二月賣新絲、五月糶新穀。醫得眼前瘡、剗却心頭肉。我願

君王心、化作光明燭。不照綺羅筵、偏照逃亡氓。

22 時興 楊貴

貴人昔未貴、咸願顧寒微。及自登樞要、何曾問布衣。平明

登紫閣、日晏下彤闈。擾擾路旁子、無勞歌是非。

23 離別 陸魯望

丈夫非無淚、不洒離別間。仗劍對尊酒、恥爲遊子顏。蜴蛇

一螫手、壯士疾解腕。所志在功名、離別何足數。

24 古詩 無名氏

客從遠方來、遺我一端綺。文綵雙鴛鴦、裁爲合歡被。著以

長相思、緣以結不解。以膠投漆中、誰能別離此。

25 歸田園中 陶淵明

種豆南山下、草盛豆苗稀。侵晨理荒穢、帶月荷鋤歸。道狹

草木長、夕露沾我衣。衣沾不足惜、但使願無違。

26 問來

爾從山中來、早晚發天日。我屋南山下、今生幾叢菊。薔薇

葉已抽、秋蘭氣當馥。歸去來山中、山中酒應熟。

27 王右軍

右軍本清真、消酒在風塵。山陰遇羽客、要此好鷺賓。掃素

寫道經、筆精妙入神。書罷籠鵝去、何曾別主人。

28 對酒憶賀監二首 李太白

四明有狂客、風流賀季真。長安一相見、呼我謫仙人。昔好

盃中物、今爲松下塵。金龜換酒處、却憶淚沾巾。

29 全

狂客歸四明、山陰道士迎。勅賜鏡湖水、爲君臺沼榮。人亡

餘故宅、空有荷花生。念此香如夢、悽然傷我情。

30 送張舍人之江東

張翰江東去、正值秋風時。天清一雁遠、海闊孤帆遲。白日

行欲暮、滄波杳難期。吳燈如見月、千里幸相思。

- 31 贈鄭溧陽
陶令日日醉、不知五柳春。素琴本無弦、洒洒用葛巾。清風
北窓下、自謂羲皇人。何時到栗里、一見平生親。
- 32 嘲王歷陽不肯飲酒
地白風色寒、雪花大如手。笑殺陶淵明、不飲盃中酒。浪舞
一張琴、虛栽五株柳。空負頭上巾、吾子爾何有。
- 33 紫駟馬
紫驪行且嘶、雙翻白玉蹄。臨流不肯渡、似惜錦帳泥。白雪
關山遠、黃雲海成迷。揮鞭萬里去、安得念香閨。
- 34 待酒不至
玉壺係青絲、沽酒來何遲。山花向我笑、正好啣盃時。晚酌
東軒下、流鶯復在茲。春風與貴客、今日乃相宜。
- 35 遊奉先寺 杜子美
已從招提遊、更宿招提境。陰壑生靈籟、月林散清影。天闕
象緯逼、雲臥衣裳冷。欲覺聞晨鐘、令人發深省。
- 36 簡鄭廣文兼正蘇司業
廣文到官舍、下馬堂階下。醉即騎馬歸、頗遭官長罵。才名
三十年、坐客寒無色。近有蘇司業、時時與酒錢。
- 37 仁義
聖治先人意、施爲日月新。漸摩今既熟、孰不荷陶鈞。
- 38 安分
壽夭莫非命、窮通各有時。迷途空役役、安分是便宜。

琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見(紺野)

39 待時

韓信曾奇時、宣尼亦厄陳。困窮千古事、君子豈常貧。

一讀してわかるように、右の詩の多くは作者・詩題・本文などが杜撰である。たとえば、作者を誤っているものに限っても複数見られる³⁶⁾。具體的に言えば、5を無名氏としているが、實際は北宋の張愈の作(『宋』卷三八二)である。7を李鄴の詩とするが、實際は晩唐の曹鄴の同題の詩(『唐』卷五百九十三)の一部である。15・16を王維の詩とするが、實際には初唐の王績の詩(『唐』卷三十七)である。また6は李紳の詩(『唐』四百八十三。一説に聶夷中の作とする)、22は楊貴の詩(『唐』卷二百四)であるが、これらは單なる誤刻の可能性がある。特に37・38・39の三首は注意に値する。それまでの體例に従えば杜甫の作品ということになるが、無論そうではない。その内容から見れば、この三首の詩も本来、幼學書に由來するものと考えられる。そして、おそらく他の三十六首も、本来はなにがしかの幼學書に引用されていたものであろう。もちろん、蔡大鼎がこれらの誤りに全く気づかなかったとするには疑問が残る。ただ、もともと他の幼學書に引かれ、更に『三字經』の冒頭に轉載されていた詩を(假に誤りがあるのを知っていたならば訂正することなく)蔡大鼎が更に引用したことは確かだろう。

これらの詩はこの「五言古詩」の部分に轉載されるだけでは

ない。卷四の光緒九年十月の記事では7の詩（実際には曹鄴の作）をやはり誤って李鄴の詩として引用し、また卷五「附紀」では13の白居易詩を「五言古詩」と同じ詩題（『唐』卷四百四十一では「商山路有感」に作る）で引用している。したがって、幼學書の蔡大鼎への影響はかなり大きいと考えられる。

このように、蔡大鼎は『北上雜記』執筆時にも漢詩文に關心を持ち続け、詩歌に關係する書物を見ていたことが確認される。また、その讀書の對象は白話文獻や幼學書にまで及ぶだけでなく、それらの影響を強く受けている。光緒年間における北京滯在時、蔡大鼎がどれだけの書物、とりわけ漢詩文に關連する文獻を所有していたかはわからない。光緒二年末の密出國時には同行する琉球の向徳宏・林世功とともに「革籠六個大小壺七個外ニ風呂鋪包等」⁽³⁹⁾を攜えていたという。蔡大鼎はおそらくこのなかに『續欽思堂集』（附『聖覽詩文稿』）の稿本を入れており、福州到着後に刊行している。そうだとすれば漢籍を持参していた可能性も否定できない。その後、福州滯在時には清の喬煌の『黃葉樓初集』⁽⁴⁰⁾を購入している。そうだとすれば、北京でも書籍、特に別集や總集などの漢詩文集を全く買わなかった、あるいは借用しなかったとは考えにくく、一定の書籍を所有し、また閲覽していたと見てよい。

では、そのような蔡大鼎がなぜ、幼學書などのような非「正統」的文獻をも読み、そこから引用や轉載まで行ったのか。前

述した「五言古詩」の冒頭の文章において、蔡大鼎はこれらの「五言古詩」が『三字經』に附されているのは童蒙に讀ませるためであり、後輩すなわち彼自身も先儒（ここでは眞僞はともかく、『三字經』の作者として名の擧がる南宋の王應麟などが念頭にあるだろう）に倣って附載したと表明している。つまり、蔡大鼎は琉球にいる子弟のために「五言古詩」の轉載を行っていたのである。

ところで、前述したように『三國志演義』もかなり上級の教材であったとはいえ、琉球における官話習得に用いられていた。また排律に關する言説も子弟のために詩作上の注意すべき事柄を示そうとしたものと受け取ることができる。このように考えた場合、『北上雜記』で言及される詩歌や詩學に關する記事や資料は琉球の讀者、特に學業に當たっているもの（子弟）を意識して記録されたとみてよい。

もちろん、杜撰な詩をそのまま引用・轉載する蔡大鼎の態度を批判することは容易である。そもそも幼學書や白話文獻中からの詩の引用という事實は蔡大鼎あるいは琉球漢文學の限界を示してもいる。しかし、『北上雜記』の編纂という問題を考える時、幼學書等からの引用や轉載は蔡大鼎が教育・啓蒙を重視した結果であることは十分に注意を拂う必要があるだろう。

六 『北京話』 について

今回の福圖本の發見で最も注目されるのが『北京話』ではなからうか。沖圖本では失われていた『北京話』は序文も含めて福圖本に完全に保存されている。

「附北京話敍」には次のように言う。

記有云。語音、不但南北相殊。卽同郡、亦各有別、故趨逐語音者、一縣之中、以縣城爲則、一府之中、以府城爲則、一省之中、以省城爲則。而天下之内、又以皇都爲則。故凡搢紳之家、及官常出色者、無不趨仰京話。則京話、爲官話之道岸。僕向來欲求是集、而未嘗得之。正在尋購之秋也。時有男錫書、帶來書本二部。其一部、曰正音撮要⁽⁴²⁾。一部曰華英通用要語⁽⁴³⁾。此皆北京官話、尤不可不學習者也。凡有志於官話者、必須購之而觀焉。若夫百家姓之字音、須要熟讀數百遍、如生徒背書、否則不便問答者歟矣。京中知字人等、不論老幼、皆熟讀之。故屢問他以姓。或有不董、再問之。他卽將百家姓之連讀者、爲答耳。千字文三字經、亦無不成誦。故皆載之于冊中、以爲易覽也。今是集也、不過記得所聞粗語而已。乃於官話、有何補益哉。故弗敢曰北京官話。幸觀者勿以此微短話爲哂焉。

昔光緒十年歲次甲申孟春

甫汝霖氏誌於蘆下寓舍

琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見(紺野)

(記に云う有り、語音は、但だ南北相い殊なるのみならず、卽ち同郡も、亦た各おの別有り。故に語音を趨逐する者は、一縣の中は、縣城を以て則と爲し、一府の中は、府城を以て則と爲し、一省の中は、省城を以て則と爲し、而して天下の内は、又た皇都を以て則と爲す。故に凡そ搢紳の家、及び官の常に出色する者は、京話を趨仰せざること無ければ、則ち京話は、官話の道岸たりと。僕向來に是の集を求めんと欲す。而るに未だ嘗て之を得ず。正に尋購の秋に在るなり。時に男の錫書、書本二部を帶來する有り。其の一部は、『正音撮要』と曰い、一部は『華英通用要語』と曰う。此れ皆北京官話たり、尤も學習せざるべからざる者なり。凡そ官話に志す者有れば、必ず須く之を購いて觀るべし。若し夫れ『百家姓』の字音、須やく熟讀すること數百遍、生徒の背書するが如くすべし。否なれば則ち問答に便ならざる者歟し。京中に字を知るの人等、老幼を論せず、皆之を熟讀す。故に屢しは他に問うに姓を以てし、或いは董せざる有れば、再び之を問う。他卽ち百家姓の連讀者を將て、答と爲すのみ。『千字文』『三字經』も、亦た成誦せざる無し。故に皆之を冊中に載せ、以爲らく覽るに易しと。今是の集や、聞く所の粗語を記し得たるに過ぎざるのみ。乃ち官話に於いて、何の補益有らんや。故に敢て北京官話と曰わず。幸わくは觀る者此微の短話を以て哂うことを爲す勿かれ。

昔に光緒十年歲次甲申孟春

甫汝霖氏輩下寓舎に誌す)

その要點をまとめると、蔡大鼎は長男の蔡錫書が持ってきた『正音輯要』と『華英通用要語』が「天下」の言葉の中心たる北京の官話を學ぶために必要だと考えていること、北京の人々は『百家姓』『千字文』『三字經』を暗唱しているので讀者の利便のために附載したこと、聞き得た「粗語」を記しただけであるため「北京官話」という書名とはしなかったことの三點である。

次に『北京話』の實際の構成を確認する。まず、「那說話、都是用得去聲、少用入聲、還多用切音、直音太少、更省字句、最不易學、故畧記左、」という短い文章があり(以下、『北京話』の部分の訓讀は省畧)、北京語(ここでは便宜的に北京の言葉の意味で用いる)の音の特徴について簡潔に述べる。その後には本稿末尾掲載の「附表」に示す七百十七項目の二字から五字の「語彙」を載せ、小字雙行注や旁注によって意味や使用頻度、音を記録している。(寫眞三) ついで、再び北京語における音について次のように記す。

大抵凡城音字樣。皆讀如纏⁽⁴⁴⁾。事、讀如是。白、讀如拜。味、讀如外。街、讀如家在切。冷、讀如論。口、讀如可。人、又讀如連。美、又讀如埋。熱、讀如畧。而

列切。又如列切。肉、與如、亦讀如畧。針與眞、讀如江。讀如閒。張與江、音較異。恰有點與燈之殊。

最後は「語彙」に關する記述である。(冒頭の「は整理の都合上、紺野が附した」

・ 呢的們、各字樣。併那個那個、字樣。皆罕用。或用這個這個、字樣。少用狠字。廣用太字。今日明日。皆不用日字。而用天字。

・ 哈與吃、有別。記云。凡飲、謂之哈。凡食、謂之吃。甯可謂哈爲吃、不可謂吃爲哈。

・ 號與字、異。古人有號有字。又有別號者多。或有號無字者有之。

・ 京人謂福建廣東一帶、爲南邊。其人爲南邊人。又江蘇安徽一帶、亦如此稱之。⁽⁴⁵⁾

・ 京中呼街、爲大街。呼橫巷、爲大衚衕、小衚衕、或作胡同。

・ 大哈哈、笑話。又謂玩器、爲大哈哈廣用之。

・ 油篋、有裝入一百多觔者。以柳條造之。福州用竹篋。

・ 凡店約用店、鋪棧庄行坊堂齋樓園津廠等之字樣。得以爲號。⁽⁴⁶⁾

・ 又謂身體之各處、爲地方。以人之在不在、爲有沒有。又

蔬菜之熟不熟者、亦爲老少。至天之晴與不晴、則稱開不開。
 ・大抵事之不妨者。廣用不要緊之三字。福州亦同。或說可
 以。其有妨者。多稱不利。或不打利。逢有動容稍急者。告
 以不忙。

『北京話』に見える言語的特徴や言語學上の價値は今後の課題とするとともに、近世漢語・近代漢語等の專家の判斷を待ちたい。本稿では、いくつかの興味深いことを指摘しておく。

第一に指摘すべきは蔡大鼎の官話への關心の高さである。「附北京話敘」では「粗語」を記したとするが、七百十七例の項目數自體、北京語への關心の高さを示している。そして、蔡大鼎の官話（特に北京の官話）への關心は『北上雜記』の他の部分にも確認される。一例を挙げておこう。卷四の光緒八年十一月の記事に、

初三日、長子出門買物、少焉回頭。乃談及、剛有說話發明者、偶有客人向店主曰、買困帽。店主不董曰、風帽麼。客人曰、不是、店主遂董曰、睡帽麼。客人曰、着。店主微笑交之。予曰、似此說話、宜留心聽着。

（初三日、長子門を出でて物を買ひ、少くして回頭す。乃ち談及するに、剛かに說話の發明する者有り、偶たま客人有り店主に向いて曰く、困帽を買わんと、店主董せずして曰く、風帽か

琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見（紺野）

と、客人曰く、是れならず、店主遂に董して曰く、睡帽かと、客人曰く、着れなりと、店主微笑して之を交すと。予曰く、此く似き說話、宜しく心に留めて聽着すべしと。）

とある。蔡大鼎が末尾に述べるのは、北京とその他の地域の語彙の相違への注意だと考えられる。

ところで、この記事の長子とは蔡錫書を指す。蔡錫書と官話の關係については、「附北京話敘」でも彼が『正音撮要』と『華英通用要話』を持参したことが記されている。そもそも、卷二の光緒七年正月の記事に「乃着男錫書、請求張心如先生、虚心領教、或學官話、或習法帖」とあるように、蔡大鼎は蔡錫書に直隸省出身の張心如なる人物について官話を學ばせている。それゆえ、『北京話』の編纂については若い蔡錫書が父の蔡大鼎に助力したのではないだろうか。

『北京話』について第二に指摘すべきことは、會話に關する資料が全く見られないということである。『北京話』には概ね語彙・音・使用頻度について多くの記載がある。これ自體は特段、奇妙ではないが、會話資料が全くないことを視野に入れたとき、『北京話』における關心の偏在は極めて興味深い。

これまで知られている琉球官話集には會話形式を採用するものも多く存在している。それでは、なぜ蔡大鼎の『北京話』には會話がないのか。その理由について、おそらく二つの可能性

が考えられる。

第一の可能性は蔡大鼎の言語能力（特に口語能力）に關係する。具體的に言えば、彼には會話集を編纂するほどの中國語口語力を有していなかったことが『北京話』に會話集を収めない原因の一つではないかと思われる。蔡大鼎は琉球において對清外交を擔當していた久米村士族であり、幼少の頃から官話を學んでいたと思われるものの、北京の國子監に留學する官生や福州に留學する勤學になったという事蹟は確認されない。その後、咸豐十一年（一八六一）に福州に進貢使の一員として赴いた際に「謝滿洲李眉春指教官話二首」（『閩山游草』所收）を詠み、現地の滿洲人に官話を學んだことが判明している。しかし、同治十一年（一八七二）から翌年にかけて福州北京間を往復した際の詩を収録する『北燕游草』の陳星聚の序文では「惟是言語多有不達、無如何耳」（惟だ是れ言語多く達せざる有り、如何ともする無きのみ）と評されている。もちろん、この一例で蔡大鼎の會話能力に厳しい判断を下すのは適切ではないかもしれない。また彼が密出國後に改めて官話を學んだ可能性は否定できず、實際、現地で雇傭した華人に對して一定の會話はできたに相違ない。ただ、既に六十前後という高齢でかつ病がちであった蔡大鼎に會話集を編纂することは能力的に困難だったのではなからうか。⁽⁵⁵⁾

第二に、蔡大鼎が會話についてはこれまでの官話のテキスト

で充分であると判断してそれを省略し、むしろ南北で差の大きいことが明瞭な音や語彙を重點的に記録した可能性が考えられる。上述したように「附北京話敍」の後半では『百家姓』『三字經』『千字文』の名を挙げ、實際に「北京話」の後ろにそのテキストを轉載している。まさに初學者向けの幼學書（かつては當時、既に琉球に入っている）であるこれらの書籍と『北京話』を同時に刊刻し、『北上雜記』に附載したということは、この『北京話』が琉球における初學者が北京語の音や語彙を重點的に學習するために用意されたテキストだったことを意味している。⁽⁵⁶⁾一方、會話は學習が一定程度進展した段階で學ぶものであり、かつてこれまでのテキストでも良いと蔡大鼎が判断したのではなからうか。

この第二の可能性をめぐって注目されるのは『北京話』が刊刻されたという事實である。蔡大鼎は琉球の漢詩人としては異例とも言えるほど、自らの詩文集を繰り返し刊刻しており、『北京話』を含む『北上雜記』の刊刻自体はその延長線上に位置づけられる。しかし、蔡大鼎が『北京話』以前に實用性を持った資料を印刷したことはなく、この点において『北京話』（あるいは『北上雜記』）はこれまでの彼の漢詩文集と性格を異にしている。また、琉球官話に關するテキストは現存するものすべてで寫本によって傳えられている。⁽⁵⁷⁾つまり、『北京話』は蔡大鼎による自ら漢詩文集の編纂・刊刻という点においても、琉球

における中國語教材のあり方という点においても異質な存在なのである。そして、上に述べたように『北京話』が初學者向けの教材という性格を持つという推論が成立するならば、印刷は同時に複数の部数を作り得る點で寫本より遙かに勝れているだろう。

いずれにせよ、この二つの可能性は矛盾することはないため、両者が併存していたかもしれない。

それではなぜ、蔡大鼎はそもそも『北京話』を編纂したのか。それは「附北京話敍」で『正音撮要』の序を引用して述べるように北京語が官話の中心である、と蔡大鼎が考えたためであろう。つまり、救國運動という現實に切迫した政治問題に關わり、同時に清國社會や國際情況の變化を實際に目撃した蔡大鼎が北京語の重要性を強く意識し、そして何よりもその直接的な學習の必要性を強く認識したからであると考えられる。もし、蔡大鼎の中國語口語能力が低かったという推定が妥當ならば、自らが爲しえなかっただけに、これらの意識や認識はより強力なものだっただろう。

七 小結

本稿は蔡大鼎の『北上雜記』についてこれまで言及されなかった福圖本の存在を報告した。そして、『北上雜記』の編纂過程、蔡大鼎の家族、引用・轉載された詩歌、附載されている『北京

琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見(紺野)

話』などを重點的に論じてきた。

特に蔡大鼎が琉球の若年の子弟を對象に讀むべき、學ぶべき詩歌や北京語などを記録している點は注目に値する。これに關しては、蔡大鼎が卷五「附紀」で出典を示さず、「於傳有之」として朱熹(實際には劉子澄らが編纂にあたる)『小學』卷五の「呂舍人曰、……)學業則須是嚴立課程」の一節および注の一部を引いて、經書・史書・子書の讀書法・學習法を述べた記事も參考になる。その末尾に「然則爲子弟者、率循爲要。特此書於京中桑氏租房」(然れば則ち子弟たる者、率循要と爲せ。特に此に京中の桑氏租房に書す)とあり、また本來予定にはなかった「附紀」にわざわざこの記事を載せたことから、經・子・史の讀書法・學習法を琉球の子弟に改めて伝えたいという蔡大鼎の意圖は明白である。そして、蔡大鼎が琉球の子弟の學習・讀書の對象を述べようとするのはこの記事だけではなく、本稿で論じたように『北上雜記』全般に見られるのである。

それでは、第四章で見たように、蔡大鼎は『北上雜記』に自らの家族の情況を、選擇的態度を取りつつも詳細に述べたのだろうか。この態度と子弟のために學習・讀書の對象を示す態度とは一見、あまり關係がないように思われる。しかし、亡父母の忌日に彼等を追憶する行爲はあるべき孝心を具體化したものであり、また異國にありつつも家族・親族を心配し、その問題に對處しようとする態度は理想的な家長の姿を示している。こ

れら行動や態度も、また琉球の人々、特に蔡大鼎が最も氣に懸けていた蔡氏の子弟を意識したものであり、彼にとって記録されるべきものだったのである。

今回の福圖本の発見によって、蔡大鼎の救國運動期における北京での情況がさらに明らかになるだろう。ただ、本稿は議論されるべき問題を全て論じたものではなく、不足の點も多い。そのため、福圖本が『琉球王國漢文文獻集成續編』など今後の琉球關係漢籍の叢書類で影印化されることが望まれる。そうなれば、個別の記事をもとにして蔡大鼎研究、ならびに琉球漢文學・琉中日關係史研究など關係諸分野の研究が進展すると期待される。そして、そういった個別的研究と並行して『北上雜記』全般を論じることも必要になるだろう。

【注】

- (1) 武藤長平『西南文運史論』（同朋舎、一九七八年八月復刻版、初出は一九二六年）「琉球訪書志」論文初出は一九一七年）一八七頁によれば、戦前の沖繩縣立沖繩圖書館に「蔡汝霖（紺野注。汝霖は蔡大鼎の字）『北上雜記』」が所蔵されていた。また沖繩縣立沖繩圖書館編『琉球史料目録』（第一版は一九二四年二月。本稿は法政大學沖繩文化研究所『沖繩縣立沖繩圖書館郷土史料目録』（一九八二年三月）による）九頁にも書名が見え、四冊と記録する。

- (2) これらは現在、沖繩縣立圖書館ホームページ「貴重資料デジタル書庫」で畫像が公開されている。また高津孝・陳捷主編『琉球王國漢文文獻集成』（復旦大學出版社、二〇一三年七月第二版）にも沖繩縣立圖書館本の影印が収録される。その他、『傳世漢文琉球文獻輯稿』編輯委員會編撰『傳世漢文琉球文獻輯稿』（鷺江出版社、二〇一二年一月第一版）にも所蔵機關を示さないまま、『北燕游草』『北上雜記』の影印が収録されるが、これらも沖繩縣立圖書館本をもとにしている。

- (3) 紺野達也「蔡大鼎の漢詩文集の諸本について―琉球末期の漢詩文集の刊行を中心に―」（古典研究會編『汲古書院販賣』『汲古』第六十一號（二〇一二年六月）五三―五九頁）を参照。同論文で取り上げた諸本のうち、前掲注(2)『琉球王國漢文文獻集成』は慶應義塾圖書館藏『漏刻樓集』（附『伊計村遊草』）、同『欽思堂詩文集』、早稻田大學圖書館藏『續欽思堂集』（附『聖覽詩文稿』）の影印を収録する。『傳世漢文琉球文獻輯稿』も早稻田大學圖書館藏本を影印するが、やはり所蔵機關を示していない。

- (4) 確認された資料については、うるま市立中央圖書館市史編さん室編『うるま漢詩ロード散策 No.1』（二〇一三年二月）、『うるま漢詩ロード散策 No.3』（二〇一四年二月）、『うるま漢詩ロード散策 No.5』（二〇一五年二月）に書影を載せる。

- (5) 多くの論考・著作があるため、近年の代表的、かつ『北上

雜記』に直接關わる部分を一部擧げておく。赤嶺守「脱清人の嘆願書について―琉球復舊運動研究への視座―」（聯合報文化基金會國學文獻館主編『第一屆中國域外漢籍國際學術會議論文集』（聯經出版、一九八七年三月初版）六一〇頁、西里喜行『清末中琉日關係史の研究』（京都大學學術出版會、二〇〇五年二月初版）三八五―三八六、三八九―三九〇頁（初出は一九九〇年）、後田多敦『琉球救國運動 抗日の思想と行動』（Mugen、二〇一〇年一〇月初版）九五・一四七頁。また、與石豐伸譯注『蔡大鼎集 閩山游草 續閩山游草』（オフィス・コシイシ、一九九七年一月發行）一一三―一二六頁も参照。

(6) 崎原麗華「蔡大鼎と『北上雜記』にみる儒學思想」（『沖繩文化』編集所『沖繩文化』第四十四卷一號（通卷一〇七號）（二〇一〇年七月）二二―四七頁。

(7) 王振忠「琉球漢文燕行文獻的學術價值―以晚清蔡大鼎的『北上雜記』爲例―」（安徽大學『安徽大學學報（哲學社會科學版）』（二〇一四年第二期（二〇一四年三月）八八一―〇〇頁。ただし、王氏も認識しているように蔡大鼎等は密使であり、この『北上雜記』を通常の「燕行文獻」と同列に扱うのはいささか違和感を覺える。

(8) 筆者は沖繩縣うるま市の「蔡大鼎「伊計村遊草」等調査研究事業」の成果報告書（近刊）に「蔡大鼎の基礎的研究のための覺書―家族と生涯を中心に―」を發表する予定である。既に校正を終えているが、本稿執筆時にはまだ出版

琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見（紺野）

されていらない。したがって、本稿と同内容のことがある場合、重複をおそれずに論じることがある。

(9) 前掲注(2)を参照。

(10) この福圖本が中琉關係史研究の中心の一つである福州で見過ごされてきた理由ははっきりとしない。ただ、福圖本が他の琉球關係著作とは異なり、カード目録上で福建関連文獻として扱われていないことから、調査の対象から漏れたのかもしれない。

(11) 「跋」を除き、版心には「北上雜記卷五」と記されている。

(12) 以下の引用文の句讀點の表記は便宜上、紺野が改めた（場所は原書そのままである）。

(13) 小字雙行で「雖經記之見下、僅止幾月、故云爾、」とある。

(14) 小字雙行で「頁、頭也、與首同、」とある。

(15) 実際には上述したように福圖本に見える卷五「附紀」には光緒十年の記事が見える。なお、沖圖本にのみ残る封面から『北上雜記』の刊行が光緒十年であることはすでに知られていた。そして、今回発見された福圖本の「跋」最末尾には「甲申仲冬下浣、書於長安之旅館、」とあることから、少なくとも光緒十年十一月下旬以降の刊刻であることがわかる。蔡大鼎（伊計親雲上）は翌年三月十五日には北京へ向けて福州を出發し（琉球人龜川盛棟訊問調査書）（琉球政府編『沖繩縣史 第15卷資料編5雜纂2』（琉球政府、一九六九年六月發行）三七五頁）、五月に總理衙門に請願書を提出している（西里喜行編『琉球救國請願書集成』（法政大學

沖繩文化研究所、一九九二年一〇月發行）一三三—一三六頁、初出は一九八七年）これらの記述に従えば『北上雜記』の刊刻は光緒十年の年末となる。ただし、蔡大鼎の場合、『續欽思堂集』の封面に光緒三年とあるにもかかわらず、同書冒頭には光緒四年と記された「鄭夫子大人佳藻書贈」が存在しており、『北上雜記』についても封面の記述を全面的に信賴することはできない。

- (16) 『北上雜記』の冒頭にある謝維藩の「贈詩」其二の結句に「曾由伯氏送三卿」（曾て伯氏に由りて三卿を送る）とあり、原注も「三卿、亦指君全毛林諸人也。伯氏指吾兄也」とい、光緒五年に兄である謝維垣が蔡大鼎等と同行して北京に赴いたことを指している。西里喜行「土通事・謝必振とその後裔たち—中琉交渉史の一側面—」（琉球大學教育學部『琉球大學教育學部紀要』第六〇集（二〇〇二年三月）三二—三九頁も参照。なお、「幼臣」が字だとすれば、謝維藩は『續欽思堂集』の序を記した謝維焜と同一人物ということになる。また引用文に見える「翼臣」（謝爺）は謝幼臣の兄の謝維垣を指す。前掲注（8）紺野論文も参照。
- (17) 謝維藩・謝維垣の父の謝鼎も生前、蔡大鼎の漢詩文集の添削を行っていた。前掲注（8）紺野論文を参照。
- (18) 小字雙行で「同姓異祖」とある。
- (19) 小字雙行で「同姓異祖」とある。
- (20) 前掲注（8）紺野論文を参照。
- (21) 前掲注（8）紺野論文は蔡大鼎の弟のうち、少なくとも

大業は毛氏に、大經は鄭氏に養子に出ていることを論じている。つまり、彼等は姓が變わり、特に前者は長兄の蔡大鼎と同様、當時、救國のために清に渡っている。したがって、このような情況の下にあった蔡大鼎が父母兄弟の記録を後世に伝えようとした可能性も考えられる。

- (22) 蔡大鼎は密出國以前にも「辛未七月念九日逢先嚴忌辰書懷」、「己巳五月六日逢先慈忌辰書懷二首」（いずれも『續欽思堂集』）がある。また那霸市企劃部市史編集室編『那霸市史資料篇 第1卷6 家譜資料 2（下）』（那霸市役所、一九八〇年三月）九三—九三三頁は眞境名安興「縣史編纂史料・那霸ノ部」を引き、蔡大鼎の孝行の具體的情況とそれを琉球王府が褒賞したこと記録する。前掲注（6）崎原論文四三—四五頁も参照。
- (23) 「曾賀週歲」とはいわゆるタンカーユーエーの行事を指す。前掲注（8）紺野論文も参照。
- (24) 蔡大鼎はしばしば家族以外にも占卜を行っている。たとえば卷二の光緒七年二月の記事に「客歲七月間、未知國事何日結局與其吉凶、乃爲之卜卦。……」とある。
- (25) 卷二の光緒六年の記事に「郷書何處達、歸雁洛陽邊。藉汝平安報、羈留在北燕」が唯一かと思われる。ただし、前半は王灣「次北固山下」詩（『全唐詩』（中華書局排印本、一九六〇年四月第一版。以下、『唐』と記す）卷百十五）の末尾二句を用いている。
- (26) この記事について、「見説」は「者」までかかると見るこ

ともできる。しかし、そうだとすれば、既に四韻の「排律」を琉球國內で作った経験のある蔡大鼎がわざわざ記す必要はないように思われる。

- (27) なお、この李白詩の第一句「牀前明月光」、第三句「舉頭望明月」からも理解されるように蔡大鼎は『唐詩三百首』など通行詞華集を讀んでいたことが明らかとなる。森瀬壽三『唐詩新攷』（關西大學出版部、一九九八年一〇月出版）「李白「靜夜思」の構造」五三―五五頁、同「李白「靜夜思」本文の異同」六六―七三頁を参照。なお、この李白の詩は卷二の光緒七年二月の記事にも見える。

- (28) 琉球における黒黨と白黨の形成と對立等については前掲注(5)後田多著書二二九頁―二三三頁がわかりやすい。

- (29) 小字雙行で「是臥龍先生所作者也」とある。

- (30) 回数 は便宜上、毛宗崗評改『三國演義』（上海古籍出版社排印本、一九八九年二月第一版）による。

- (31) 武藤長平「薩藩及び南島の支那語學獎勵」（京都文學會『藝文』卷九下九號（一九一八年九月）九〇頁参照）。

- (32) 紺野達也「開かれつつある琉球漢文學の新たな世界―蔡大鼎の作品を中心に」（琉球大學編『知の源泉くやわらかい南の學と思想5』（沖繩タイムス社、二〇一三年三月初版）七七一―七九頁参照）。

- (33) 本稿では、宋詩について便宜的に北京大學古文獻研究所編『全宋詩』（北京大學出版社）の卷數を『宋』卷×と示す。

琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見（紺野）

- (34) 幼學書については版本を確定することがかなり難しい。ここでは便宜的に『童蒙須知・名賢集』（中華書局、二〇一五年八月第一版）に見えることを確認した。

- (35) 「百家姓同音」（なお、版元は異なるが「同音百家姓」が存在する）は『京都文成堂、泰山堂、各梓行者』を、「千字文同音」は『京都文成堂藏版者』を節記したと記される。

- (36) その他、詩題・本文の異同については多くの問題があるものの、ここでは指摘を割愛する。

- (37) この他、4も『唐』卷四百七十三・五百七十四で孫革もしくは賈島の詩とするが、蔡正孫『詩林廣記』（中華書局排印本、一九八二年八月第一版）後集卷九は無本の作としている。26も宋代以降、僞作とする説が現れるものの歴代の『陶淵明集』に収録されている（この點については井上一之『陶淵明集』所收「問來使」詩に關する一考察―詩的言語における時代性」（早稻田大學中國文學會『中國文學研究』第二十一期（一九九五年二月）一一―一七頁を参照）。したがって、これらの詩は他の詩の杜撰さとは性質を異にするだろう。

- (38) たとえば38の詩について、鄧紅蕾「從蒙學看中國傳統倫理的特色」（中南民族大學『中南民族大學學報（人文社會科學版）』一九九三年第五期）一二三頁では「神童詩」から引用する。ただし、管見の限り、日本に所藏される『神童詩』に37・38・39の詩は見えない。

- (39) 前掲注(5)後田多著書六〇頁。

- (40) 現在は早稻田大學圖書館寧齋文庫藏。前掲注(4)『うるま漢詩ロード散策 No.3』三頁(紺野達也執筆)を参照。他に、『北上雜記』卷一「雜記問答記」には「往者在越、需得三蘇文集」とあり、時期は未詳ながら、蔡大鼎が福州で『三蘇文集』を購入し、内容を見ていることが確認できる。
- (41) 『北上雜記』卷二の光緒七年二月の記事に、長男の蔡錫書が上海で購入した『竹枝詞』が見える。
- (42) 小字雙行で「此書共四冊、咸豐乙卯年、春鑄、福建禪小凌雲閣藏板」とある。『正音撮要』の版本の流れについては、高岸晃夫『正音撮要』札記(關西大學大學院文學研究科『千里山文學論集』編集委員會『千里山文學論集』第一一號(二〇〇九年三月)八一―八七頁は太田辰夫・王爲民の研究を踏まえて整理する。また、黃薇「重考『正音撮要』的版本問題」(東北師範大學古籍整理研究所『古籍整理研究學刊』二〇一三年第四期(二〇一三年七月)四七・四八頁にも版本の紹介がある。ただし、蔡大鼎のいう咸豐五年福州刊本については全く言及がない。
- (43) 小字雙行で「一本、光緒己卯六月鑄、上海申報館藏板」とある。『華英通用要語』について、鄒振環「十九世紀下半期上海的『英語熱』與早期英語讀本及其影響」(上海市檔案館『檔案與史學』二〇〇二年第一期(二〇〇二年一月)四五頁は『申報』一八八四年一月十日の廣告に「系將華英日用各語互翻成文」とあるのを紹介する。
- (44) 小字雙行で「從此以下、將凡音皆之三字、概省不用、字樣二字亦同」とある。
- (45) 旁注に「讀如岸」とある。
- (46) 小字雙行で「江南、卽前明之南京、今分江蘇安徽二省」とある。
- (47) 旁注に「音仕眼切、又如江去聲」とある。
- (48) 旁注に「音唱」とある。
- (49) 小字雙行で「京人謂之爲店東」とある。
- (50) 小字雙行で「復謂不通曰不董」とある。
- (51) 小字雙行で「復謂睡爲困覺」とある。
- (52) 小字雙行で「復謂官話爲說話、或稱京話、南邊人、都稱官話、或稱北京話」とある。
- (53) 前掲注(5)後田多著書六一頁によれば、蔡錫書は光緒二年に三十六、七歳だったようである。なお、光緒八年十一月の別の記事には「吾每雜記、概令長子、迭爲討論、故助之者不少、而況附於北京話後乎」とあり、参考とならう。
- (54) 前掲注(8)紺野論文。
- (55) それでは長子である蔡錫書の口語能力はどうだろうか。この点にははっきりとはしないが、おそらくは蔡大鼎よりは身につけていたと思われる。ただし、前掲注(43)論文では『華英說部撮要』の「系將平常官話分部互翻、并將『紅樓夢』『傳家寶』等書摘翻英語、較諸『華英通用要語』已進一層矣」という『申報』掲載の廣告も引用する。廣告を比較する限り、官話の學習には『華英說部撮要』がより適切であるように思われる。この推論に誤りがなければ、蔡錫

書は官話の學習により適切な書籍を選ぶだけの言語能力がなかった可能性も否定できない。

- (56) 前掲注(31) 武藤論文九〇頁では「『二字話』『三字話』『四字話』『五字話』等の短語篇が先づ學習すべき初歩の教科書であった」という。「北京話」は字數毎に並んではなく、おおむね内容別に語彙を配列しており、「分類語彙集形式」を採用している(琉球官話集の形式については村上嘉英「近世琉球における中國語學習の様態」(東方學會「東方學」第四十一輯(一九七一年三月)九四・九五頁を参照)。しかし、最大で五字と概ね初級段階の「語彙」を収録すると言えよう。

- (57) 高津孝・榮野川敦編『増補琉球關係漢籍目錄―近世琉球における漢籍の収集・流通・出版についての総合的研究―』(二〇〇五年三月)に著録する琉球人の手による官話資料はすべて寫本である。また近年発見された關西大學圖書館長澤文庫藏の琉球官話集(内田慶市編著『關西大學長澤文庫藏琉球官話課本集』(關西大學出版部、二〇一五年三月發行を参照)も同様である。前掲注(1) 武藤著書一九九頁では「『二字話』等をあげて「多く寫本である」というが、戦前には少ないながらも刊本があったか否かは未詳。

- (58) 「語音」官話之道岸」までは「正音撮要」の序文である。「正音撮要」序文そのものについては長澤規矩也編『明清俗語辭書集成第三期』(汲古書院、一九七四年二月發行)所收「正音撮要」影印二二八頁および前掲注(42) 高岸論文

琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見(紺野)

七九一八〇頁参照。

- (59) 便宜上、前掲注(2)『琉球王國漢文獻集成』第二冊所收琉球版『小學句讀』(琉球大學附屬圖書館藏本影印)によつた。

- (60) 前掲注(7) 王論文九〇頁は「蔡大鼎顯然希望自己撰述能成爲後來者了解中國特別是北京的重要資料」と述べる。しかし、たとえば『小學』は近世琉球において「基礎的教養の中核を占め」(高津孝「博物館と書物の東アジア―薩摩・琉球と海域交流―」(榕樹書林、二〇一〇年八月發行)「近世琉球の書物文化―八重山博物館所藏漢籍―」(初出は一九九四年)一七七頁)であり、それゆえ琉球版・和刻本など『小學』關連書籍も比較的多く現存している(前掲注(57) 高津・榮野川目錄)。したがって、『小學』の内容自體は蔡大鼎が北京で知り得たものではなく、また琉球にいる子弟も當然知っていなければならないことである。そうだとすれば、本稿で論じたように、『北上雜記』を通して、琉球の子弟が學ぶべき、あるいは讀むべき對象を改めて示そうとした蔡大鼎の姿勢が見えると考える方がより適切であろう。

※本稿は、日本學術振興會科學研究費「新出資料による琉球處分期琉球知識人の總合的研究―そのアイデンティティに着目して」(基盤研究(B)(一般)、研究代表者高津孝、研究課題番號65283009、二〇一四年～二〇一六年)による研究成果の一部である。

(附表)

- ・本表は『北上雜記』付載『北京話』の“語彙”の表である。
- ・各項目は「番號/大字/小字/旁注」の順になる。
- ・番號は筆者が整理したもの、番號を付す方法は寫眞を参照。
- ・大字内の（ ）は小字雙行に分けている部分を示す。
- ・傍注の（ ）は傍注の付された大字を示す。
- ・一部、通行の字體に改めた。たとえば你・広・蒙はそれぞれ你・麼・蒙となる。

1	稟安稟見	/ / (安) 音讀如岸	31	出城	/ /
2	謁見	/皆全/(謁) 又如各	32	開缺	/交代/
3	面見	/ /	33	候選	/ /
4	號房	/交帖所/	34	候補	/ /
5	掛號	/以帖記簿/	35	即用	/ /
6	全帖	/ /	36	即補	/ /
7	單帖	/ /	37	選不了	/不能選/
8	名片	/同上/	38	保舉	/舉薦/
9	大爺	/ /	39	保	/同上/
10	親王	/皇子/	40	中保	/土俗口入/
11	王爺	/ /	41	京腔	/北京腔口/
12	中堂	/大學士/	42	京樣	/ /
13	堂官	/尙書/	43	京式	/同上/
14	總辦	/ /	44	府尹	/府官外省不敢/
15	臺甫	/尊號/(甫) 音付	45	制臺	/總督/
16	貴甫	/同上/	46	制軍	/同上/
17	高名	/不要尊諱/	47	撫臺	/撫院/
18	大名	/同上/	48	中丞	/同上/(丞) 音成
19	一家	/同姓同祖/	49	藩臺	/布政司/
20	單家	/同姓異祖/	50	藩司	/同上/
21	遠親	/ /	51	摺差	/諸省帶奏文者/(摺) 車入聲
22	請安	/請聖安/	52	差官	/ /
23	請假某日	/ /	53	差使	/同上/
24	假滿請安	/ /	54	當差	/跟伴/
25	續假某日	/ /	55	六爺	/六男王爺/
26	請訓	/請辭行/	56	七爺	/ /
27	少陪	/不相見/	57	大少爺	/老爺長子/
28	出京	/起程/	58	二少爺	/老爺次子/
29	進京	/ /	59	太太	/官員之妻/
30	進城	/ /	60	太夫人	/官員之母/

- | | | | | | |
|-----|--------|-----------------|-----|------|---------------|
| 61 | 泐信 | / / (泐) 音受 | 106 | 胡同 | /同上/ |
| 62 | 蔡老爺 | / / (老) 音落 | 107 | 勞駕 | /多謝/ |
| 63 | 老爺 | / / | 108 | 費心 | /同上/ |
| 64 | 老蔡 | /平等恭敬之稱/ | 109 | 叩頭 | /同上/ |
| 65 | 親父子 | / / | 110 | 難為你 | /同上山東話/ |
| 66 | 乾兄弟 | /拜兄弟/ | 111 | 打那裡去 | / / |
| 67 | 年老 | / / | 112 | 向那裡去 | / / (向) 上亦通 |
| 68 | 年少 | / / | 113 | 謝謝 | / / |
| 69 | 他有沒有 | /在不在/ | 114 | 勞勞 | / / |
| 70 | 三場得意 | / / | 115 | 千萬 | / / |
| 71 | 同年 | /同榜共中式者/ | 116 | 拜託 | / / |
| 72 | 大挑 | /會試挑授縣官/ | 117 | 不敢 | /不肯/ |
| 73 | 在旗 | /滿洲人/ | 118 | 不敢吃 | / / |
| 74 | 民人 | /百姓/ | 119 | 董 | /通字樣/ (董) 讀如東 |
| 75 | 告他 | /叫他/ | 120 | 不董 | / / |
| 76 | 教書 | /指教人/ | 121 | 聽不來 | / / |
| 77 | 念書 | /同上/ | 122 | 興 | /肯字樣又謂能爲興/ |
| 78 | 打個倣子 | /求寫字/ | 123 | 不興 | / / |
| 79 | 先生寫格 | /同上/ | 124 | 對 | /亦肯字樣/ |
| 80 | 作摺 | /石搨/ (搨) 他入聲 | 125 | 不對 | / / |
| 81 | 古帖 | / / | 126 | 要 | / / |
| 82 | 可以 | /可也/ | 127 | 不要 | / / |
| 83 | 幾天回家 | /答/ | 128 | 不忙 | /不要忙/ |
| 84 | 過節 | /五月五日後/ | 129 | 拜年 | / / |
| 85 | 艾子 | /五日插門者/ (艾) 音愛 | 130 | 拜壽 | /賀生日/ |
| 86 | 回頭 | /回頭/ (頭) 音讀如桃 | 131 | 謁節 | /正五八拜見/ |
| 87 | 回頭晚 | /來得遲/ | 132 | 差不了 | / / (了) 又如漏 |
| 88 | 來晚 | /同上/ | 133 | 不了 | /不成/ |
| 89 | 睚睚 | /看看/ | 134 | 不幹 | /不中用/ |
| 90 | 失走 | /誤路/ (走) 又如坐上平聲 | 135 | 多復來 | /幾天回來/ |
| 91 | 走 | /回 / | 136 | 咋來 | / / |
| 92 | 進過來 | / / | 137 | 干什麼 | /爲什麼/ |
| 93 | 不好走 | / / | 138 | 干麼 | /同上/ |
| 94 | 不好做 | / / | 139 | 找什麼 | /尋什麼/ |
| 95 | 做不了 | / / | 140 | 沒有尋件 | / / |
| 96 | 做(得不)來 | / / | 141 | 什麼用 | /爲何用/ |
| 97 | 照拂 | /照顧/ | 142 | 趕得上 | / / |
| 98 | 上廟 | / / | 143 | 趕不上 | / / |
| 99 | 拈香 | /上香/ | 144 | 有福氣 | / / |
| 100 | 燒香 | /同上/ | 145 | 不必憂慮 | / / |
| 101 | 上衙 | / / | 146 | 不理會 | /不曉道理/ |
| 102 | 上府 | / / | 147 | 不說理 | / / |
| 103 | 上店 | / / | 148 | 不公道 | / / |
| 104 | 上街 | /上與到通用/ | 149 | 那裡話 | / / |
| 105 | 衚衕 | /小街/ | 150 | 不 | / / |

- 151 相好 /叮嚀人/
- 152 免子 / /
- 153 筆帽 /筆帽/
- 154 筆塔 /同上/
- 155 筆壺 /同上/
- 156 墨盒 /銅硯/
- 157 墨壺 /同上/
- 158 文章紙 /大史紙/
- 159 文章格 /格眼紙/
- 160 摺子 / / (摺) 音則
- 161 表幸紙 /草紙/
- 162 粗紙 / /
- 163 哈酒 /吃酒 廣用之/
- 164 哈壺 /同上/
- 165 紹興酒 / /
- 166 膏梁酒 / /
- 167 粧醉的 /假醉/
- 168 真醉的 / /
- 169 裝烟 /吃烟/
- 170 抽烟 /同上 廣用之/
- 171 通烟袋 /通之者/
- 172 烟探子 /同上/
- 173 水烟 / /
- 174 草烟 /烟草/
- 175 鼻烟 / / (鼻) 音必
- 176 哈茶 /吃茶/
- 177 不喝 /不哈/
- 178 喝不喝 / /
- 179 開水 /沸水/
- 180 滾水 /同上/
- 181 斟茶 /倒茶/
- 182 篩茶 /同上/
- 183 端茶 /冲茶/
- 184 茶壺 /茶家/
- 185 茶壺樑 /提壺之器/ (樑) 讀如聯
- 186 茶杯 / /
- 187 茶碗 /同上/
- 188 茶船 / /
- 189 茶臺 /同上 是圓的/
- 190 茶館 /茶店/
- 191 老房 /古房/
- 192 閒房 /鄰家/ (閒) 又如這
- 193 鄰居 /同上/
- 194 閒壁兒 / /
- 195 坑桌子 /滿洲桌子/
- (坑) 音堪 (桌) 音作
- 196 八仙桌子 /八人用/
- 197 桌墊 /卓脚/ (墊) 音店又如當
- 198 椅子 / /
- 199 板凳 / /
- 200 墊子 /椅子之褥/
- 201 烟頭 /烟袋之頭/
- 202 烟嘴 / /
- 203 瑪瑙嘴 / /
- 204 玉嘴 / / (玉) 兩入聲又油
- 205 不錯 / /
- 206 差多 / /
- 207 不少 /多 /
- 208 多多 / /
- 209 馬尾拂 /馬尾掃/
- 210 蠅縫 /同上/ (縫) 或作刷
- 211 家伙 /家之用器/
- 212 小家伙 /裝入什物/
- 213 不通快 /不爽快/
- 214 不舒服 /冒着風/ (舒) 音受
- 215 勞乏 /疲倦/ (勞) 又如六 (乏) 音發
- 216 疲乏 /同上/
- 217 心不開 /瘋癲/
- 218 踟躕 /徜徉/
- 219 玩玩 / /
- 220 剃頭 / /
- 221 順剃 / /
- 222 上剃 / /
- 223 打辮子 /不剃整髮/
- 224 辮縫 /辮子之絲線/
- 225 連子 /假髮子/
- 226 辮連子 /同上/
- 227 修鬚子 / /
- 228 修脚 /修脚爪/ (脚) 又如枝着切
- 229 膚皮 /頭之鱗/ (膚) 音虎
- 230 玩上塞 /除身壅氣/ (塞) 又如書
- 231 玩合 /除頭壅氣/
- 232 一點緊筩 / /
- 233 頓快 /爽快/
- 234 褲子 / / (褲) 苦去聲
- 235 背身 /領褂/
- 236 抗肩兒 /同上/
- 237 大褂 /凡長褂呼大褂/
- 238 大衿 /長袖襖/
- 239 對衿 /小衿/

- 240 汗褂 /汗褸/
 241 扣子 /鈕也/
 242 廣扣 /廣東扣子/
 243 洋扣 /西洋扣子/
 244 一付 /一副/
 245 馬蹄袍子 / /
 246 皮襖 / /
 247 皮帽 / /
 248 耳帽 / /
 249 便帽 / /
 250 小帽 /同上 廣用之/
 251 瓜皮帽 /同上/
 252 睡帽 / /
 253 風帽 /本國貢使戴之/
 254 種帽 / /
 255 大帽 /廣用之/
 256 暖帽 / /
 257 涼帽 / /
 258 羅帽 /羅造的/
 259 草帽 / /
 260 帽頂 / /
 261 帽痂瘡 /同上/
 262 皮鞋子 / /
 263 棉鞋 / / (棉) 音明
 264 靴子 / / (靴) 讀如雪
 265 壽靴 /死者用之/
 266 成衣 /縫衣/
 267 成衣店 / /
 268 冥衣鋪 /死人衣店/
 269 一托 /五尺/
 270 穿衣 / /
 271 脫衣 / /
 272 山東繭綢 / /
 (繭) 又如間 (綢) 音求
 273 山西棉綢 / /
 274 鷄皮綢 /縐綢/
 275 染色鋪 /染色店/ (染) 又如熟然切
 276 大青 / /
 277 毛藍色 / /
 278 月白色 / /
 279 鴨蛋色 / /
 280 面 /衣之表/ (面) 又如名
 281 裏 / /
 282 樓子 /鋪床之柁也/
 (樓) 如利去聲又如六
 283 棉襖子 /同上/
 284 皮襖子 /同上/
 285 棉花 / /
 286 包袱 /包什物之布/
 287 別的布 /同上/
 288 蓆子 / / (蓆) 音息又夕
 289 豆腐 / / (豆) 托上聲又如多
 290 醬豆腐 / /
 291 凍豆腐 / /
 292 牙豆 /廣用之/
 293 蠶豆 /同上/ (蠶) 昨含切又如蒼
 294 豆芽 /豆芽菜/
 295 醬瓜 / /
 296 鹽瓜 / /
 297 黃瓜 / /
 298 青瓜 / /
 299 香菰 / /
 300 木耳 / /
 301 西瓜 / /
 302 甜瓜 /至小而圓的/
 303 瓠子 /芋瓠 本國無/ (瓠) 音符
 304 絲瓜 / /
 305 癩瓜 /苦瓜/
 306 乾粉條 /綠豆粉/
 307 花生 /落地花/
 308 高笋 / / (笋) 音送
 309 鹽萵笋 / /
 310 菠菜 / /
 311 黃菜 /雞蛋/
 312 白薯 /地瓜/ (薯) 音樹
 313 炎黃菜 /火化化/
 314 油炸鬼 / /
 315 麻花 /同上/
 316 元宵 /本國之糖小餅/
 317 酸梅糕 / /
 318 杏仁粉 / / (杏) 音勝
 319 八珍粉 / /
 320 月餅 /仲秋作之/
 321 葱 / / (葱) 音聰
 322 老葱 / /
 323 少葱 / /
 324 蒜 / /
 325 糖蒜 / /
 326 韭菜 / / (韭) 音九
 327 茄子 / / (茄) 茶上平聲

- 328 肘子 /豬蹄/ (肘) 音叫
- 329 排骨 /豬排骨/
- 330 猪肉餅 / / (豬) 音朱 (餅) 音畧
- 331 肉丸子 / /
- 332 鯉魚 / / (鯉) 呂去聲
- 333 花旗魚 /好味的/
- 334 鯽魚 /大的多多/
- 335 螃蟹 /罍也/ (蟹) 音舌
- 336 魚餅 / /
- 337 早飯 /點心稀飯皆同/
- 338 中飯 / /
- 339 晚飯 / /
- 340 弄餅 /煮飯/ (弄) 讀如濃
- 341 做飯 /同上/
- 342 弄菜 /煮菜/
- 343 做菜 /同上/
- 344 弄得好 / /
- 345 開飯 /辦饌出來廣用/
- 346 擺飯 /同上/
- 347 盛飯 / /
- 348 載飯 / /
- 349 盛飯來 / /
- 350 載飯來 / /
- 351 同塊 /一同/
- 352 同塊吃飯 / /
- 353 乾飯 /飯/
- 354 別吃 /勿吃/
- 355 吃不慣 / /
- 356 莫飯 /沒有飯/
- 357 老米 /舊米/
- 358 玉米 /南蠻黍/
- 359 番子 /同上/ (番) 又如半
- 360 大米 / /
- 361 小米 /稷/
- 362 稀飯 /粥/
- 363 稀稀 / /
- 364 太稀 / /
- 365 哈粥 / /
- 366 籠屉 /甑也/ (脛) 音替
- 367 飯杓子 / / (杓) 音燒
- 368 湯杓子 / /
- 369 煮房 / / (煮) 又如求
- 370 煮師父 / /
- 371 廚師父 /同上/
- 372 辣椒 /胡椒/ (椒) 又如着
- 373 番椒 /同上/
- 374 舂椒 /抹椒/ (舂) 又如稱
- 375 醬 /豆醬/
- 376 清醬 /又呼醬油/
- 377 黃醬 /同上/
- 378 黑醬 /同上/
- 379 生薑 / / (薑) 音江
- 380 聽戲 /看戲/
- 381 唱曲 /唱歌/
- 382 花子 /乞丐/
- 383 沒有錢 /貧窮/
- 384 盜 /盜人/
- 385 賊盜 / /
- 386 算命 /卜卦/
- 387 橫笛 /笛音的/ (橫) 又如狼爺切
- 388 明見 /明日再見/
- 389 復見 /再見/
- 390 明早 /明日清早/
- 391 一早 /絕早/
- 392 清早 / /
- 393 改日 /日後/
- 394 白天 /日裡/ (白) 又如拜
- 395 夜來 /夜裡/
- 396 別去 /不要去別勿也/ (別) 讀如拜
- 397 別拉 / /
- 398 別 /不要/
- 399 刮風 /風大/
- 400 刮散 /風止/
- 401 刮起 / /
- 402 灰土 /灰塵/
- 403 皇上求雪 / /
- 404 大皇帝求雨/ /
- 405 該下雪 /差不多下雪/
- 406 該下雨 / /
- 407 不能下雨 / /
- 408 地乾 / /
- 409 得雪 (四五) 寸 / /
- 410 得雨 (四五) 寸 / /
- 411 南風雨 /多下雨/
- 412 連雨 /澇雨/
- 413 連陰天 /同上/
- 414 天開 /天晴/
- 415 霜降 / /
- 416 臉水 /洗臉水/
- (霜) 音雙 (降) 又如站家切

- 417 打水 /取水/
 418 擔水 /挑水/
 419 扛水 /兩人之擔水/ (扛) 音江又如乾
 420 兩個人臺 /同上/
 421 甜水 / / /
 422 清水 / / /
 423 苦水 / / /
 424 鹹水 / / /
 425 臉布 / / /
 426 手布 / / /
 427 汗布 / / /
 428 汗巾 / / /
 429 擦布 / / /
 430 臉膀 /面疼大/
 431 膀 /肥人/
 432 愛乾淨 / / /
 433 洗乾淨 / / /
 434 擦乾淨 / / /
 435 剛 /剛纔/
 436 剛來 /剛纔來/
 437 當下來 /同上/
 438 剛去 / / /
 439 困覺 /睡覺/
 440 我要困 /我要睡/
 441 坐久要困 / / /
 442 打板 /爲守者/
 443 打更 /同上/
 444 診怎麼 /診脉怎麼/
 445 莫脉 / / (脉) 又如理
 446 痲瘡 /瘡也 廣用之/
 447 火快子 /挾火者/
 448 火剪 /同上 似剪者/
 449 煤炭 /石炭/ (煤) 又如迷賣切
 450 煤 /同上/
 451 煤球 /爲圓者/
 452 煤毒 / / /
 453 木炭 / / /
 454 炭 /同上/
 455 炎 /凡者熱者日炎/
 456 開火 /起火/
 457 找物 /尋物/ (找) 音早
 458 天寒 /好冷/
 459 天暖 / / /
 460 陰天 /天陰/
 461 太陽 /日也/
- 462 燈草 /燈心草/ (燈) 又如東當切
 463 油 /燈油/
 464 羊蠟 /蠟燭/
 465 油簍 /裝入油者/
 (簍) 音樓樓亦讀如六
 466 出家 /和尚/
 467 上人 /同上/
 468 等一等 /等着/ (等) 讀如頓
 469 擔攔 /停會/
 470 窓糊紙 /似日本紙甚大/
 471 糊窓 /糊窓戶/
 472 糊板 / / /
 473 花紙 /圍屏紙/
 474 胰子 /洗手者/
 475 驚胰 /同上/
 476 香皂 /香肥皂洗手者/
 477 宮皂 /同上/
 478 你花錢 /給錢/
 479 褒錢 /加賞錢/ (褒) 又如福
 480 推遠 /厭達/
 481 推重 / / /
 482 辛苦 / / /
 483 苦 /同上/
 484 掌櫃 /總管店事之人/
 485 夥計 /在店使令者/
 486 大夥計 / / /
 487 在行 /有工夫者/
 488 手車 / / (手) 又如曉去聲
 489 手爐 / / /
 490 地爐子 /床爐/
 491 炕爐子 /同上/
 492 爐子 /廣用之/
 493 火爐架 /火爐脚/ (火) 又如回
 494 火爐架 /火爐之套/
 495 上床 /登床木床曰床/
 496 上炕 /同上土床曰炕/
 497 牀腿 /床脚/
 498 炕沿 /床涯/
 499 沒有工夫 / / /
 500 沒有多閑 /同上/
 501 沒有工 /同上/
 502 有工 / / /
 503 三年工夫 / / /
 504 還有 /又有/ (還) 又如舍
 505 幾探 /幾回/

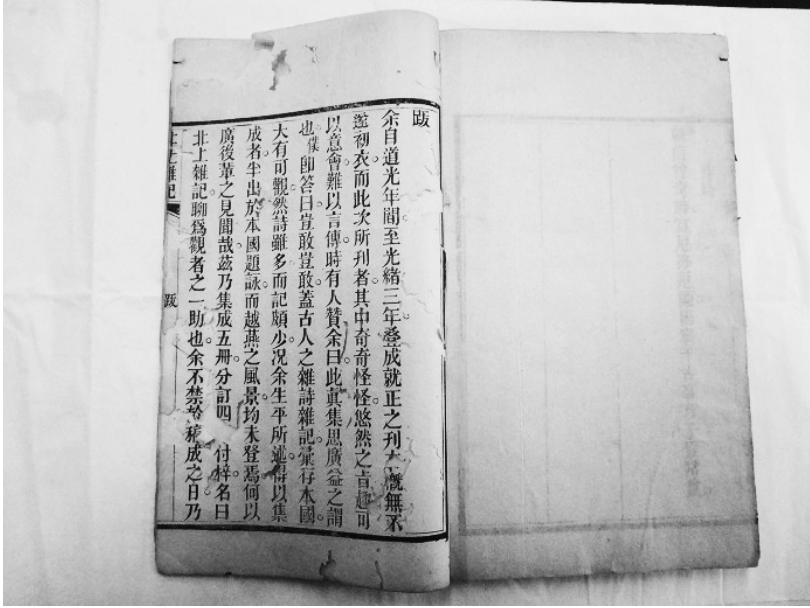
- 506 大哈哈 /笑話/
507 夜壺 /尿壺/
508 解手便子 /同上/ (解) 又如在閒切
509 小恭 / /
510 小便 / /
511 溺水 /同上/
512 大恭 / /
513 大便 / /
514 討屎 / /
515 痰壺 /唾壺/
516 唾沫 /口水/
(唾) 又如吐上聲(沫) 又如托音末
517 大眼角 /眼口/
518 小眼角 /眼尾/
519 雞毛担 / / (担) 多早切
520 簸箕 /收塵者/ (簸) 音樸
521 掃帚 /掃把/ (帚) 音樹
522 笤帚 /同上/ (笤) 音條田聊切
523 筐籬 /柳木扁籬子/ (筐) 音頗
524 小筐籬 /入腴子類/
525 一站 /一日行路之稱/
526 琉璃廠 / / (廠) 音唱
527 錢鋪 /換錢店/
528 趙你一吊 /趙還/
529 發客 /賣客/
530 幾天開市 / / (市) 音是
531 多兒錢 /多少價錢/ (兒) 又如列
532 小搭裢 /錢袋/
533 價錢有短 / /
534 不到一吊錢 / /
535 吃虧 /折本/
536 虧一點 / /
537 不當好 /不好/
538 上價 /添價/
539 未賣 / / (未) 音每又味
540 足金子 /金子好的/
541 潮金子 /低金/
542 淡金子 /同上/
543 足分銀 /銀子好的/
544 足銀 /同上/
545 白銀 /同上/
546 松江銀 /不好的/
547 銀鏢子 /銀錠/ (鏢) 音課
548 大鏢子 /大錠/
549 小鏢子 /小錠/
550 大元寶 /五十兩一錠/
551 小元寶 /十兩一錠/
552 洋錢 /洋銀/
553 黃銅 / /
554 白銅 / /
555 京平 /戥子/
556 市平 /同上輕重有差/
557 這巴喇 /這邊/ (巴) 筆把切
558 那巴喇 /那邊/
559 狗子 / / (狗) 讀如高去聲
560 善狗 /好狗/
561 下狗 /生狗/
562 看家 /狗之守/
563 思思 /叫狗之語/
564 小貓 / / (小) 又如少
565 會吃貓 / /
566 養大 / /
567 花貓 / /
568 三花貓 / /
569 淨貓 /好貓/
570 下貓 /生貓/
571 公母兩口 /廣用/
572 滑滑 /叫貓之語/
573 耗子 /鼠子/
574 老鼠 /同上/ (鼠) 又如受
575 木貓 /殺鼠之器/
576 騾駝 / / (騾) 音樂(駝) 又如托
577 驢子 / / (驢) 又如禮
578 驢子 / / (驢) 又如呂
579 驢鞭 /驢子之陽物/
580 交尾 /禽獸之會通/
581 大燕子 /有大小/
582 做福 /燕子巢/
583 燕巢 / / (巢) 音朝
584 燕窩 /藥名/
585 燕菜 /同上/
586 官燕 /同上/
587 烏鴉 /烏鳥/
588 老鴉 /同上/ (鴉) 音瓜
589 山鴉 /同上較小/
590 烏鴉窩 /呼巢曰窩/
591 蒿子 /其鳥有交尾/ (蒿) 音緣
592 家雀 /雀 /
593 家雀窩 / /
594 下蛋 /生蛋/

- 595 鴿子 /鳩屬栖家者/ (鴿) 又如國
 596 鴿子蛋 / /
 597 袱鴿子 /生鴿/
 598 袱鷄子 /生雞/
 599 什麼鳥 / /
 600 大雁 / /
 601 聲音好 / /
 602 會叫 / /
 603 不會叫 / /
 604 蝙蝠 /又叫福鼠/
 605 蜂子 / /
 606 蜂窩 /蜂巢/
 607 蝸 /又叫蟬/ (蝸) 音迢
 608 秋蟬 / / (蟬) 音纏又題
 609 枝鳥 /同上/
 610 田雞 / /
 611 水鷄 /同上/
 612 螳螂 / /
 (螳) 又如多道切 (螂) 又如龍
 613 蠅蠅 /螽斯之類/
 614 螞蟻 /蟻子/
 615 黑螞蟻 / /
 616 白螞蟻 / /
 617 榆樹 /造車者/ (榆) 音諭
 618 槐樹 /同上/ (槐) 音懷又回
 619 盤香 /日用之香/
 620 盤香架 /掛香者/
 621 耍架盤香 / /
 622 火鍋 /暖鍋/
 623 變戲法 /幻屬爲之者/
 624 房漏 /房子有漏/ (漏) 讀如六
 625 蟻灰 / /
 626 石灰 / /
 627 青灰 / /
 628 大工 / /
 629 小工 / /
 630 師父 /叫諸匠曰師父/
 631 新的賤 / /
 632 古的貴 / /
 633 太多 / /
 634 太少 / /
 635 太高 / /
 636 挪借 /借物/
 637 撥燈檯 /燈心撥/ (撥) 音泊
 638 一步 / / (步) 音布又父
- 639 說話 /廣用之/
 640 京話 / /
 641 官話 /罕用之/
 642 二音 / /
 643 一對 /同上/
 644 自大 /誇口合之臭字/
 645 別自大 /廣用之/
 646 你十幾歲 / /
 647 八個齡 /十八歲/ (八) 答
 648 四十多歲 / /
 649 四十下來 / /
 650 不一樣 /不同/
 651 兩件 /同上/
 652 乳名 / / (乳) 又如六去聲
 653 小名 /同上/
 654 高麗 /朝鮮國/
 655 洋鬼子 /西洋人/
 656 緬甸 /國名/ (緬) 音勉 (甸) 音電
 657 蒙古 /同上/ (蒙) 又如滿下平聲
 658 口外 /蒙古屬馬多/ (口) 又如可
 659 淘氣 /欺弄/ (淘) 又如套上平聲
 660 殺子 /打殺罵話/
 661 肉 /忘入肉的/ (肉) 又如草去聲
 662 忘八肉的 /同上/ (忘) 或作王
 663 忘八旦 /同上/ (旦) 或作蛋
 664 打仗 /相戰爭口亦同/
 665 核桃 /玩器活血者/
 (核) 又如胡骨切又皆
 666 鐵毯 /同上/
 667 石毯 /同上/
 668 花石毯 /同上/
 669 網輪 /同上/
 670 口琴 /同上/
 671 通通 /一共/
 672 通通曉得 / /
 673 送神 /送竈君/
 674 送竈王 / /
 675 送菜 /祭竈王者/
 676 鞭炮 /喜炮即百響/
 677 兩響炮 /同上太的/
 678 拉鈴 /使開門者/
 679 房東 /房主/
 680 店東 /店主/
 681 大夫 /太醫/ (大) 又如帶
 682 先生 /同上恭敬之稱/

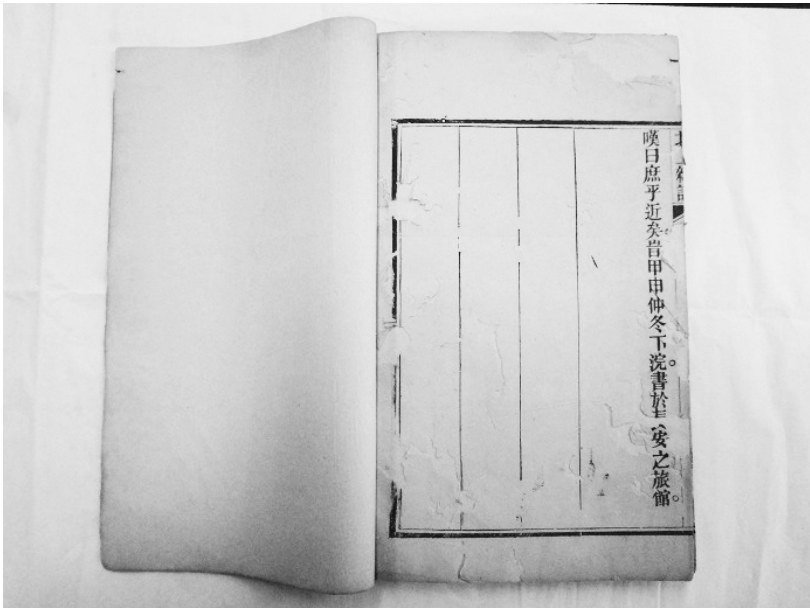
- | | | | |
|---------|----------|-------------|-------------|
| 683 定規 | /廣用之/ | 701 大概(大約)怪 | / / / |
| 684 娶親 | / / / | 702 不要怪 | / / / |
| 685 討親 | /同上/ | 703 不願意 | /不愛廣用/ |
| 686 定親 | / / / | 704 願意 | / / / |
| 687 新郎 | / / / | 705 我等你 | / / (等) 讀如頓 |
| 688 新人 | / / / | 706 老等 | /懸望/ |
| 689 太醫 | /入太醫院者/ | 707 苦得狠 | / / / |
| 690 出殯 | /出棺/ | 708 上月 | / / / |
| 691 送殯 | /同上恭敬之稱/ | 709 下月 | / / / |
| 692 假錯 | /假話/ | 710 今月大建 | / / / |
| 693 你說 | / / / | 711 下月小建 | / / / |
| 694 不要緊 | /廣用之/ | 712 咖啦哩 | /隔日咖啦哩/ |
| 695 不打緊 | / / / | 713 今朝 | /元朝/(今) 又如成 |
| 696 不利 | /不便/ | 714 嗟歧門 | /宣武門/ |
| 697 不打利 | /同上/ | 715 划子 | /小舟/(划) 音發 |
| 698 頭大 | /最大的/ | 716 歸班銓選 | /候選/ |
| 699 再有大 | /其次大的/ | 717 他是忝 | /有人忝奏/ |
| 700 該不該 | /可否/ | | |

〔注〕61 「泐」については、『北上雜記』卷二に「接閣堂弟泐^{ツマ}扎」とある。

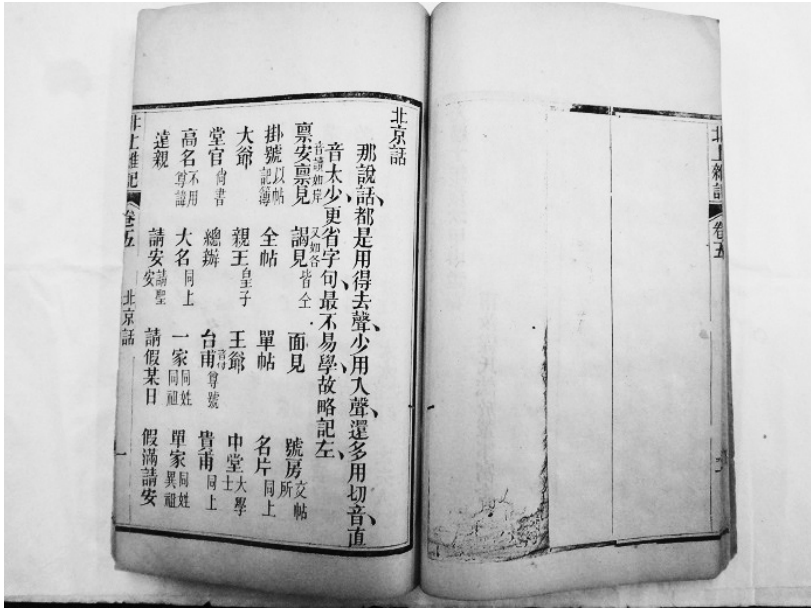
琉球漢文學者蔡大鼎の晩年に關するいくつかの新知見(紺野)



寫真一 福圖本『北上雜記』跋一



寫真二 同上跋二



寫真三 福圖本『北上雜記』・『北京話』冒頭